

Title	「文学からの社会学」再考
Sub Title	Rethinking the "sociology from literature"
Author	近森, 高明(Chikamori, Takaaki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.49- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：文学社会学の可能性
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 「文学からの社会学」再考

### Rethinking the “Sociology from Literature”

近森 高明

#### 1. 「文学からの社会学」の下流で

まずは、なぜ今回のシンポジウムのコメンテーターを担当させていただくことになったのか、筆者自身の立ち位置を、自己紹介を兼ねて説明させていただきたい。筆者の専門はW. ベンヤミンやW. シヴェルブシュの仕事をもととしつつ、都市空間を基盤的な技術の次元から読み解こうとする都市の技術社会史であり、直接的に文学社会学という分野では仕事をしてこなかった。けれども筆者は、1990年代末から2000年代初頭にかけての京都での大学院生およびOD時代に、なかば偶然に「文学からの社会学」の流れに近いところに——下流に引っかかる感じで——いたといえる。

具体的には、筆者はつぎの三つの研究会に参加していた。

ひとつは「コミュニケーション研究会」であり、これは富永茂樹先生の主宰で、井上俊先生、亀山佳明先生、そして清水学氏が参加されていた（私が清水さんに初めてお目にかかったのは、この研究会を通じてであった）。文学や戯曲、漫画などを自在に論じているうちに、それが勝手に社会学になるといったスタンスが共有され、後述する「文学からの社会学」が暗黙的に実践されているような研究会であった。井上俊先生についていえば、論考『シスター・キャリー』と初期シカゴ学派（2001年）の構想段階でのご報告をされたり、また日本社会学会での会長講演「社会学と文学」（2008年）でも触れられる、キャンパス・セクハラの微妙さを描いたデイヴィッド・マメットの戯曲『オレアナ』を扱った報告をされたりしていた。なお、研究会の主要メンバーである富永先生、亀山先生、清水氏のお三方は、井上先生の定年退職を記念して刊行された『文化社会学への招待』（2002年）を共同編集されているが、本書のサブタイトル「〈芸術〉から〈社会学〉へ」は、本研究会の基本姿勢をよく示している。

二つ目は「分身の会」であり、これは作田啓一先生の主宰で、亀山佳明先生、岡崎宏樹氏などが参加されていた（作田先生が亡くなったあとも研究会は継続している）。社会学という枠組みを超えて、ベルクソン、ドゥルーズ、ラカン、レヴィナスなどの思想や哲学を縦横に援用しつつ、文学や映画、あるいは時代を象徴するような犯罪を題材として、独自の人間学的な議論を重ねていた。岡崎氏（岡崎 2016）が端的にまとめるように、象徴化しきれないが実在し、人間の思考や行動に決定的な影響を及ぼす「リアルなもの」の複数的な探求が、作田人間学のひとつの軸であり、研究会を束ねていた中心的なベクトルであっただろう。ここで文学作品は、そうした「リアルなもの」が、具体的なイマジネーションのかたちで表出するテキストという

近森高明 「文学からの社会学」再考

『三田社会学』第24号（2019年7月）49-55頁

位置づけにあった。なお 2010 年代初頭から中盤にかけて井上俊先生も本研究会に参加されていた。

三つ目は「現代社会学研究会」であり、これは井上俊先生を中心に、池井望先生、大村英昭先生、磯部卓三先生、細辻恵子先生などが参加され、(池井先生と大村先生は故人となったが)現在も継続している研究会である。オーソドックスで柔軟な社会学的視座を共有する研究会であり、おもに文化社会学に属するさまざまな主題を扱うなかで、文学が取りあげられることもあるが、とくに強く主題化はされない。

さてポイントは、これら三つの研究会の主要な参加者がいずれも、作田啓一・富永茂樹編『自尊と懐疑——文芸社会学をめざして』(1984 年)の執筆者メンバーであるという点である。本書は「文学からの社会学」の実践例を集め、「文学社会学」(ないしは「文芸社会学」というジャンルを打ち立てようとする、ある種のマニフェストの書であり、日本における文学社会学の展開を考えるうえでひとつの画期となる仕事である。「コミュニケーション研究会」および「分身の会」では、しばしば「文学のほうが社会学よりも大きい」といった発言が議論のなかで交わされていたが、そのように「文学からの社会学」を自明のフレームとする場に参加し、そのフレームに半身を浸していた立場から——ということはつまり、ナチュラルに「文学からの社会学」に肩入れしてしまう立場から——本稿では「文学からの社会学」(清水氏に近い立場)とブルデュー派の文学社会学(松下氏とヨッホ氏の位置する立場)とを眺めた、解題的なコメントをさせていただくこととしたい(以下、基本的に敬称略とする)。

## 2. 文学社会学の見取り図

やや時間が経過しているが、しかしシンプルな見通しをつけてくれる図式として、富永茂樹([1988]1994)による弘文堂『社会学事典』の項目「文学社会学」を参照しよう。そこで富永は文学社会学を、「①文学をめぐる社会学」「②文学についての社会学」「③文学をとおしての社会学」「④文学からの社会学」の四つに分類している。

まず「①文学をめぐる社会学」とは、作家の出自や出版部数など、文学をめぐる外在的条件を調査するような研究群であり、作品の内容そのものには立ち入らないアプローチである。つぎに「②文学についての社会学」とは、作品の形式や内容と、それが書かれた社会の構造のあいだの対応関係に注目する、一種の知識社会学的な研究群である。文学の場と、その内部での位置取りゲームを対象とするブルデュー派の文学社会学は、あえていえば四つのなかではこのカテゴリーに位置づけられるだろう。

さらに「③文学をとおしての社会学」とは、文学という素材をとおして既存の社会学的な概念や命題の理解を深めようとする立場である。ルイス・コーザー(Coser ed. 1963)の試みた“Sociology Through Literature”がこれであるが、ただしここでは文学は、あくまで例証の素材という位置にとどまっている。すなわち、社会学の理論や命題や概念にとって文学は外在的なポジションにある。

最後に「④文学からの社会学」とは、文学作品を母胎として、既成の思考を越えた新しい視野や主題の発見をもたらすアプローチである。これは、文学作品を社会学の理論や概念を用いて分析するのではなく、その逆に社会学の側が、文学作品の側から新たな社会学的洞察を学ぼうとする立場である。プルーストやスタンダールなどの文学作品から「欲望の模倣」という命題を抽出した、ルネ・ジラルール（Girard 1961=2010）の一連の仕事がこのアプローチの範型となっている。

ここで、前者の二つ（「①文学をめぐる社会学」「②文学についての社会学」）と後者の二つ（「③文学をとおしての社会学」「④文学からの社会学」）の立場の違いは、大まかに説明対象の違いとして整理できる。前者の二つの立場にとって説明対象は「社会的事実としての文学」（Sapiro 2014=2017）であり、社会（社会的な要因や力）で文学（文学現象や文学実践）を説明しようとしている。他方、後者の二つの立場にとって説明対象は社会、もしくは「文学的事実としての社会」であり、文学で社会を説明しようとしている。ここで文学は、社会を説明するための視座ないしは方法として機能している。

「文学的事実としての社会」について、もう少し説明を加えておこう。井上俊は「文学の社会形成力」について言及しており、社会的経験や行為の様式が文学によって形成されたり変容されたりすることがある、と指摘する（井上 2008）。たとえばフィクション作品に描かれる恋愛のあり方と、現実社会の恋愛のあり方との関係については、二つの方向での関わり方が考えられる。一方で、フィクション作品に描かれる恋愛は、現実社会の恋愛のあり方を反映しているとみる見方がありえ、これは反映論と呼ぶことができる。だが他方、フィクション作品に描かれる恋愛のあり方が一種のモデルとして作用し、人びとの現実の恋愛のあり方を形成するという方向性もありうる。こちらのベクトルを重視する立場は（現実）構成論と呼ぶことができよう。フィクション作品を模倣して現実を生き、登場人物の目で世界を眺めるとき、私たちは現実を「文学的」に生きていることになり、そのかぎり「社会は文学的現象である」ということができる（井上 2008: 12）。

ただし「文学からの社会学」を、文学で社会を説明しようとする営みであると整理してしまうのは、じつはミスリーディングであり、その本質をとらえ損ねる一面的な整理の仕方でもある。その点について筆者は、シンポジウム当日の質疑応答のさいの清水氏の発言から気づかされた。

清水氏の提唱する「社会の詩学」は、社会のなかに文学を見つける営み、あるいは目の前の社会を「文学的事実としての社会」としてとらえ返す実践として、文学から社会を説明する「文学からの社会学」の延長上に属するものと筆者は理解しているという旨を述べた。それに対し清水氏は、社会から文学を説明するにせよ、文学から社会を説明するにせよ、文学と社会を互いに外在的にとらえている点に変わりはなく、自身としては両者を内在的な関係においてとらえ、社会がすでに文学的に出来あがっているという点に着目したい、とおっしゃっていた。つまり「文学からの社会学」を、文学を方法的視点とするアプローチとみなす整理は、文学と

社会を互いに外在的な関係として想定している点で、じつは文学を社会で説明する見方と同じ平面に立っているのでは、ということになる。

この点はたしかにそのとおりであり、「文学からの社会学」の中心的特徴の所在は、文学を方法的視座とするという点とは、少し違ったところに求めるべきである。それでは、たんなる説明対象でもなく方法的視座でもない、「文学からの社会学」における「文学」の独特の位置は、いかに的確に示すことができるのだろうか。その点を以下では、文学と社会の内在的關係、文学の享受経験、そしてメディウム（媒質）としての文学、という三つの点に注目して考え直してみたい。

### 3. 「文学からの社会学」の再規定

筆者は以前に「文学からの社会学」の考え方を参照しながら、それを文化社会学の全般に適用して、「文化の社会学」「文化社会学」とは方法論的に区別される「文化からの社会学」というアプローチを提唱したことがある（近森 2014）。以下、少し長くなるが、引用させていただきたい。

文化社会学のアプローチの説明に、しばしば「文化の社会学 (sociology of culture)」と「文化社会学 (cultural sociology)」という区분이用いられる。前者は、文化現象を社会的要因から説明する立場であり（対象としての文化）、後者は、社会現象を、言語、表象、イメージ、記号、等々の文化的要因から説明する立場（パースペクティヴとしての文化）である。この二つのうち社会還元主義をとる前者にたいして、文化に独立変数の役割を認める後者のほうが、より「文化」に重きを置いたプログラムであるとされる。だが私としては後者にしても、じつは文化現象自体に本質的な興味はなく、階級の再生産やアイデンティティ・ポリティックスなど、何らかの社会学的に重要な 이슈を論じるさいの、格好の素材や説明要因として、道具的に「文化」を用いているだけではないかと感じてきた。いってみれば、いずれにしても文化「で」社会学をしているのである（もちろん、ここでいう「で」と「からの」は截然と区別されるものではなく、両者は互いにグラデーションの関係にある。さらにいえば「で」に相当するものも、当然ながら研究としての真摯さに欠けているわけではない。たとえばブルデューなどの文化を徹底的に形式的に扱うやり方は、その方法論的な潔癖さにおいて、逆説的に文化への愛情を感じさせてしまうところがある）。

このように文化を道具的に扱うアプローチにたいし、文化に内在的な視点に立ち、文化から積極的に学ぼうとする立場を、文化「からの」社会学と名づけたいと考えている。それは第一に、文化を外側から対象化するのではなく、その享受経験に内在的な視点から出発する。第二に、意味による現実構成の働きに注目し、解釈学的方法を重視する（この点は前述の「文化社会学」と重なる）。第三に、文化について、それを社会学の分析概念で切り刻む対象として扱うのではなく、むしろ社会学の側がそこから積極的に学ぶべき、さま

ざまな概念や命題の母胎とみなす。このように文化の享受経験から出発し、文化の構成的働きに注視し、文化から学ぼうとする社会学が「文化からの社会学」である。換言すれば、文化を問いの対象とするのではなく、あるいは方法的視点とするだけでなく、むしろそのなかで社会学的な問いを立ちあげるフィールド、ないしは問いのメディウム（媒質）とみなし、その豊かさを指し示すなかで、自分たちの社会のあり方を考える営みが「文化からの社会学」である。（近森 2014: 94-5）

この引用での考えを踏まえれば、「文学からの社会学」における「文学」を「方法としての文学」と性格規定してしまうのは、じつのところ、それが道具的に文学「で」社会学をしているとみなすことと等しいことになる。そこで、この引用をもとに、あらためて「文学からの社会学」を筆者なりに定義するならつぎのようになるだろう。すなわち「文学の享受経験から出発し、文学の構成的働きに注視し、文学から学ぼうとする社会学」が「文学からの社会学」である。換言すれば、文学を問いの対象とするのではなく、あるいは方法的視点とするだけでなく、むしろそのなかで社会学的な問いを立ちあげるフィールド、ないしは問いのメディウム（媒質）とみなし、その豊かさを指し示すなかで、自分たちの社会のあり方を考える営みが「文学からの社会学」である、と。

#### 4. 「文学」の固有性をめぐる逆説

享受経験に内在的な視点から出発するという点でいえば、「文学からの社会学」の奇妙な特徴は、「文学」の固有性にこだわっているようにみえながら、じつはそうではないという点にある。

たとえば作田啓一の『生の欲動——神経症から倒錯へ』（2003年）では、犯罪や非行と映画が同列に並んでいる。神戸連続児童殺傷事件を扱った「酒鬼薔薇少年の欲動」の隣に「フェリーニの『道』」が置かれ、さらに「倒錯としてのいじめ」「空虚感からの脱出——豊川市主婦刺殺事件の少年」といった論考が続いている。あるいは『現実界の探偵——文学と犯罪』（2012年）では、サブタイトルからして文学と犯罪が同一の平面上にあるが、「夢野久作」「島尾敏雄」「武田泰淳」と並んで、池田小児童殺傷事件や秋葉原などの各種通り魔事件を扱った「不特定多数を狙う犯罪」が置かれている。すなわち「リアルなもの」を探究する作田の人間学的思考にとって、その思考を触発する主題となりうる以上、文学や映画などフィクション作品であれ、現実の犯罪であれ、同じ位置価値をもつのであり、そのかぎり「文学」の固有性にはこだわっていないことになる。

あるいは井上俊の「社会学と文学」においても、文学と社会の関係が、芸術一般と社会の関係とほぼ等価のかたちで考えられている。井上はつぎのように述べている。「文学や芸術、あるいは文学を含めた広義の芸術は、私たちの経験や感性や行為、そして社会生活のなかに、さまざまな形で織り込まれています。その意味では、社会は芸術的現象であるといってもよいでしょう。[.....] もちろん、ここでいう芸術は多様な領域を含めて考えてよいと思います。文学は

もとより、絵画や音楽、演劇や映画、漫画やアニメ、さらにはファッションやスポーツなどを含めてもよいでしょう」(井上 2008: 13)。すなわち、芸術という上位カテゴリーのもとで、文学は、映画や音楽、ファッションやスポーツなどと置換可能な関係にあるのである。

このように「文学からの社会学」の立場にある論者たちが、意外と「文学」の固有性には拘泥していない事実には照らしてみると、一見すると「文学」から距離をとっているブルデュー派の文学社会学のほうが、奇妙なしかたで「文学」の固有性にこだわっているようにも思われる。

文学との距離の取り方という面で見ると、「文学からの社会学」は個別の作品の内容に深くコミットしており、その意味でこのアプローチにおける「文学」の位置づけは「経験としての文学」であるといえる。それは素朴な享受経験をベースにしており、読書経験のなかの感動から出発するアプローチである。たとえば作田は『白痴』論の冒頭で、自身の 17 歳時点の読書経験をふり返って述べる。「読み終わったあと、天地がひっくり返り、世界が逆立ちしているように見えた。この小説に書かれていることが現実であり、日常の世界が仮構であるかのように思えたのである」(作田 1988: 61)。

その一方でブルデュー派の文学社会学は、個別の作品の内容には踏み込まず、客観的な距離をとったうえで、文学という場における相互的な位置取りゲームのみをみずからの対象とする。それは「経験としての文学」に対して、いわば「制度としての文学」を相手にしているといえよう。

だがブルデュー派のアプローチは、そのように内容の水準を突き放す一方で、場としての文学の自律性をいささか強く想定してしまい、他の芸術ジャンルとの相互関係や、新興メディアによる文学それ自体の変容——たとえば文学と漫画と映画が「コンテンツ」として同列に並んだり、ジャンルの輪郭が相互に融解したりする状況——を、うまく視野に収められないところがある。言い換えれば、場の内部での位置取りゲームを詳細に扱う一方で、その場自体が他の場と結び合う関係性や、その場自体の変容をうまく扱えないところがある。

ここには不思議な逆説がある。すなわち、「文学からの社会学」は内容に素朴にコミットするがゆえに、「文学」の固有性はどうでもよくなる——つまり社会学的想像力を触発する媒質であるかぎり犯罪でも他の芸術形態でもよい——のに対して、ブルデュー派は内容に踏み込まず距離化するがゆえに、むしろ「文学」の固有性(≒文学の制度的自律性)を強く想定してしまう、という逆説である。

\*

この逆説の意味するところを見据えながら、「文学からの社会学」とブルデュー派の文学社会学、あるいは「経験としての文学」と「制度としての文学」とが生産的に交流するような地点から、あらたな文学社会学の試みが展開されることを期待したい。

【文献】

- 近森高明, 2014, 「DOING SOCIOLOGY タグづけされる世界と「くくり」の緩やかな秩序」『ソシオロジ』59(2): 93-100.
- Coser, Lewis A. ed., 1963, *Sociology through Literature: An Introductory Reader*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Girard, René, 1961, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Paris: Grasset. (=1971, 吉田幸男訳『欲望の現象学——ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』法政大学出版社.)
- 井上俊, 2001, 「『シスター・キャリー』と初期シカゴ学派」『哲學研究』572: 1-24.
- , 2008, 「社会学と文学」『社会学評論』59(1): 2-14.
- 亀山佳明・富永茂樹・清水学編, 2002, 『文化社会学への招待——〈芸術〉から〈社会学〉へ』世界思想社.
- 岡崎宏樹, 2016, 「〈リアル〉の探求」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂, 258-310.
- 作田啓一・富永茂樹編, 1984, 『自尊と懐疑——文芸社会学をめざして』筑摩書房.
- 作田啓一, 1988, 『ドストエフスキーの世界』筑摩書房.
- , 2003, 『生の欲動——神経症から倒錯へ』みすず書房.
- , 2012, 『現実界の探偵——文学と犯罪』白水社.
- Sapiro, Gisèle, 2014, *Sociologie de la littérature*. Paris: Éditions La Découverte. (=2017, 鈴木智之・松下優一訳『文学社会学とはなにか』世界思想社.)
- 富永茂樹, [1988]1994, 「文学社会学」見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂, 783.

(ちかもり たかあき 慶應義塾大学文学部)